図書館報

第 56 号

発行　社高等学校
編集　図書委員会

「誰でも天才になれる」本

教頭　三谷　治

1　はじめに

夏目漱石といえば「吾輩は猫である」が有名だと思いますが、私は読んだことがありません。

平成２８年、毎日新聞が実施した「読書世論調査」の結果で一番多く読まれているのは漱石の「坊っちゃん」(61%)でした。

「小説を読むというのは(哲学でも同じかもしれないけれど)、別の時代の、別の国の年齢も性別も宗教も言語も美意識も価値観も違う、別の人間の内側に入り込んで、その人の身体と意識を通じて、未知の世界を経験すること」(内田樹「街場の読書論」太田出版、2012 年)らしいです。私は「坊っちゃん」は読んだことがありますが、あまり小説に興味がありません。

しかし、漱石の講義録である「私の個人主義」を読むと、我々は幸福のためにどうすればよいのか、漱石が我々によく考え伝えようとしていた様子がわかります。

この世に漱石はいないけれども、本には、何回も漱石と食事をともにして、仲良くなって初めてわかるような深い思考が披露されています。

だから、私はエッセイなどをよく読んで、故人やその道の権威者の偉大な心を知ろうとしています。

2　君たちに必要な勉強とは

さて、3学期の始業式で次の話をしました。

勉強には２つの種類があると思います。

一つは、「ある目標を達成するための勉強」です。これは、大学に入学するとか会社に就職する、資格を取得するための受験勉強・テスト勉強です。

もう一つは、「学ぶこと自体を楽しむという勉強」です。これは、自分の好きなこと、趣味などいわゆる教養を高めるとでも言えるものです。

(※途中の話は省略します)

そろそろ1、2年生は目標を定めて、勉強を受験勉強すなわち「テストでいかに高得点をとるか」という勉強モードに切り替えなくてはなりません。テスト勉強が楽しくて仕方ない人はそれでよいのですが、「点数とりの勉強はつまらない」と思っている人は「今はテスト勉強に励む時期なんだ」と割り切ってください。人生１００年のうちで「テスト勉強を頑張る」のはこの時期だけです。「○○は好きだけど□□は嫌い」とか「おもしろくない、つまらない」のは個人の嗜好です。「興味の無い勉強をしなければならない」ことから逃げないで、その後の人生で自分の好きなこと、「学ぶことを楽しむ勉強」を存分にしたらよいのです。

ただし、受験勉強の結果、目的の上級学校等に入学したとしても、それはただ受験勉強のテクニックに秀でていただけで、社会を生き抜く知恵を持っていることにはなりません。このことは地下鉄サリン事件の教団幹部たちが、高学歴の研究者や医者などのエリートが多かったことからもいえます。

今、テスト勉強の仕方がわからない人は、まず自分にあった勉強方法を確立してください。方法は1つではありません。その人にあったものが必ずあります。

3　おすすめの本

それで、今回は勉強の仕方の参考としていただくための本を紹介します。

「だれでも天才になれる」という次の本です。

池谷裕二
「だれでも天才になれる　脳の仕組みと科学的勉強法」
ライオン社、二〇〇四年

中学生向けに書かれた本で1時間で読み終えられます。

私たちの脳には絶えず、大量の情報が入ってきます。見えているものの他にも周囲の人の声や漂うにおい、服の肌ざわり、足に感じる自分の体重……。もし、それらをすべて漏れなく記憶したならば、脳は5分以内に限界になってしまうそうです。

そうならないためにも、脳は入ってきたほとんどの情報を記憶しないで、そのまま消しているとのことです。脳はそもそも覚えることよりも、忘れることのほうをずっと得意としているのです。

つまり、忘れるということは、脳科学的にはきわめて自然なことで「なかなか覚えられない」ということは、しごく当たり前なのです。

ですから、私たちが知識を身につけるためには自分の脳をだまして記憶させる必要があるのです。

自分の脳をだます？どのように脳をだますのかは本を読んでください。

この本を通して皆さんの学ぶ意欲が向上することを願っています。

三年一組　青田　日奈

『パリ行ったことないの』　山内マリコ

私が紹介する本は「パリ行ったことないの」という本です。連続短編小説のようになっているので少しずつ読み進めることができます。この本の主人公は臆病すぎて一度も海外に行ったことがない三十五歳のあゆこをはじめとする十人の女性です。年齢も境遇も様々な十人が憧れの街パリに対する想いから〝本当に何もしないただ無為な時間を過ごすフランス流バカンスツアー〟を通じて結びついていきます。パリに行けば自分が見つかるのか。私は何がしたいのか。私には何ができるのか。と、とまどいながらも自分の人生を見つめ、前に進んでいこうとするこの十人の物語です。

十人の女性たちはとてもリアルに描かれています。例えば、パリの物はおしゃれに見える、海外に行ったことがないことがコンプレックスになる、何か言い訳を見つけて挑戦していないことがある、学生だからと一歩踏み出せないでいることなどがこの十人の様々な視点から描かれていて共感できます。きっと十人のうちの一人に自分を重ねて読むことができると思います。また、十人が結ばれるきっかけとなったツアーのコンセプトが日本のせかせかと動き、みっちりと予定が組まれたツアーではなく、〝本当になにもしない〟というツアーであることも魅力の一つです。パリのほのぼのとした生活によりリアルさが出ていて、私はフランスへの憧れが強くなりました。より一層行ってみたいなと思いました。

個性豊かな十人の主人公たちは、海外に憧れがある人もそうでない人も、何かしたいことに挑戦しようという人の背中を押してくれます。読み始めにはわからないけど、読み終えた後はなぜかとてもやる気になれる本です。私は特に女の子にこの本をおすすめします。

三年一組　植田　奈々香

『響け！ユーフォニアム』　武田綾乃

私が紹介する本は「響け！ユーフォニアム」という本です。この本は吹奏楽部を題材とした内容の本です。アニメや映画にもなっているので、タイトルを耳にしたことや見たことがある方もいるかもしれません。私がこの作品と出会ったのもアニメを観たのがきっかけです。

この作品の舞台となっているのは、北宇治高校吹奏楽部です。過去には全国大会に出場したこともある強豪校でしたが、顧問が変わってからは関西大会にも進めていませんでした。そんな中、吹奏楽部に新しく滝昇という先生が赴任してきます。滝先生の厳しいしどうのもと、生徒たちは着実に力をつけていき順調な日々と思いきや、実際はソロを巡っての争いや、勉強を優先し部活を辞める生徒も出てくるなど、波乱万丈の毎日。そんな日々を送りながら、いよいよコンクールの日がやってくるというような内容になっています。

この作品で好きな部分は、まずは人物です。作中でトランペットのソロをめげって、一年生の高坂麗奈と三年生の中世古香織が対立することになります。コンクール出場メンバーのオーディションの末、ソロを吹くように命じられたのは麗奈。しかし、周りの部員たちは三年生でコンクールに出るのも最後の香織に吹いてもらいたいと麗奈を非難。そして、再オーディションをすることになるのですが、麗奈の圧倒的な演奏で香織も周りの部員も納得させるのです。麗奈の周りの非難の声を気にせず、自分の意思を貫くメンタルの強さや、実力で相手をねじ伏せるカッコよさにとても惹かれます。

また、この作品は良い意味でも悪い意味でも学生時代の青春を感じることのできる作品です。青春の「友情」や「情熱」だけでなく、部内には必ずと言っていいほどある何かしらの「醜い感情」や「いざこざ」が描かれています。感情移入しやすい作品であると思うのでぜひ読んでみてください。

二年一組　加古　響

『言の葉の庭』　新海誠

私がこの本を読んだきっかけは、印象に残る題名だったからです。どんな庭があるのかすごく見たくなり、読んだことから始まりました。

この話は、二人の男女が庭園で出会うところから始まります。靴職人を目指している高校生の秋月孝雄は、雨の日は必ず一限目をサボり、庭園で靴のデザインを考えていました。ある日、孝雄はそこで昼間からビールを飲んでいる女性、雪野百香里に出会います。その女性は孝雄に「雷神(なるかみ)の　少し響(とよ)みて　さし曇り　雨も降らぬか　君を留めむ」を言い残して去っていき、梅雨が明けると逢わなくなっていました。しかし、ある時学校で雪野と出会った孝雄は、雪野が古文の先生だったと知り、苦しんでいた雪野に返し歌を送りました。その返し歌で二人の仲が急展開する。その後の二人は…。

夢を持っていた孝雄にとって雪野は夢を応援してくれた人であり、また、特別で大切な人であることを万葉集の短歌を用いて強く強調されている所がとても印象に残りました。また、返し歌をした孝雄には、苦しんでいる雪野を少しでも励ましたい気持ちや、ずっとあなたの側で支えていきたいという願いがあると思います。そんな二人の思いを昔の人が作ったとされる短歌で表しており、過去と現在がつながっているような感覚に落ちいるような表現もこの話の見どころだと思いました。そして、この話のキーワードは、「靴」だと私は考えています。人生の歩き方を見失った雪野。靴を作り、これからの人生を歩いて行こうとしている孝雄。そんな二人が交じることで生まれた話に、今までのことを振り返ったり、私たちが大人になった時にぶつかるであろう壁について考えさせられたりすることもあります。この本での庭は人生のことだと私は考えます。この本を読んでもらってあなたは何の庭だと思いますか。どんなことを思いますか。自分の目で頭で確かめてみてください。

三年三組　川井　詩織

『リボン』　小川糸

私は小川糸さんが著した「リボン」という本をお薦めします。

この本は、物語の中心となる一羽のオカメインコの名前が題名になっています。リボンという名前は、最初に登場する「すみれ」というお婆さんによって名づけられました。

―わたくしの魂とひばりさんの魂は、永遠にリボンで結ばれているのです。―これは作中に出てくるすみれの言葉です。いつか、親友である少女、ひばりの前からいなくなってしまっても、リボンで魂はずっとつながっている。人と人を結ぶ「リボン」であれ。そんな願いが、リボンという名前に込められています。そうして大切に育てられたリボンは、ある日、すみれの目の前で家から飛び去ってしまいます。リボンが飛び去った先々で出会う、様々な境遇のたくさんの人々、彼らは何を思い、暮らしているのか。そして、リボンを通して何を見て、何を感じるのか。ぜひ、本書を手に取って、読んでみてください。

この本はいくつかのお話がまとまった、さらりと読める本になっています。のんびりとした気分で読書をしたい、ちょっとした空き時間に読みたい、普段本を読まない、本紹介で本を読んでみたいと思った、読書に興味はあるがいつも手を出さず終わりだ、以上の人には特におすすめです。

二年三組　永井潤

『罪人が祈るとき』小林由佳

毎日、竜二という少年からいじめを受けている主人公はある日公園で出会い、助けてくれた謎のピエロと仲良くなる。実はそのピエロは二年前に息子が竜二にいじめられて、自殺してしまったため、竜二に対して復讐の機会を狙っているようだった。そして同じ目的を持ち出会った二人は毎週のように会い、竜二を殺害する計画を立てていく。

その中で二人共に自分自身の過去の影響による心の闇や、それを振り切って前に進もうと思う気持ちがとても深く、主人公と年齢が同じなこともあり、共感できることも多くあった。主人公と出会ったピエロも普段は普通の会社員として働いていて、息子が天国に行ってからは、抜け殻のように働いており、会社の後輩からも心配されていた。そして休日になると、息子との思い出を忘れないように息子が幼い頃大好きだった自身のパントマイムをした公園へ行ったりもしていた。

この物語は一つの事件に対する一人一人のエピソードと話のつながりがとても面白いと思う。読めば読むほど話に深く入り込めて、最後に主人公がピエロに送るメッセージと送る方法がとても熱く、応援したくなる場面でもある。

機会があればぜひ読んでほしいと思う。